

イエスのことば 第 58 回

主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」（ルカ 10：41～42）

□文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解しながら、イエスのことばを一つひとつ学んでいる。
2. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。その前半の約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、退避（リトリート）と休息の時であったと同時に、弟子たちの訓練を目的とした。
3. リトリートから帰ってきた後、紀元 29 年秋 10 月の仮庵の祭りから冬 12 月の宮きよめの祭りまで、約 3 か月の間に起きた出来事（十字架刑は、紀元 30 年の春 4 月）
 - (1) 仮庵の祭りの前（ヨハネ 7：2～10、ルカ 9：51～56、マタイ 8：19～22）
 - (2) 仮庵の祭りにおいて 指導者層との衝突
 - ① 仮庵の祭りでの衝突【全体的な流れ】（ヨハネ 7：11～52）
 - ② 仮庵の祭りの期間中の個別的な衝突（ヨハネ 7：53～10：21）
律法をめぐり、光をめぐり、メシアの神性をめぐり、
生まれながらの盲人の癒やしをめぐり、「羊飼ひ」（メシア預言）をめぐり
 - (3) 仮庵の祭りの後（ルカ 10：1～13：21）
 - ① 七十人の派遣（10：1～24）
 - ② ある律法学者との問答「永遠のいのちを得るためには」（10：25～37）
 - ③ マルタとマリアという姉妹の家にて（10：38～42）
 - ④ 祈りについての教え（11：1～13）
 - ⑤ メシア的奇跡：口をきけなくする悪霊の追い出し（11：14～36）
 - ⑥ あるパリサイ人の家にて：手を洗う儀式について（11：37～54）
 - ⑦ 弟子たちへの 9 つの教え（12：1～13：21）
 - (4) 宮きよめの祭りにおいて（ヨハネ 10：22～39）

マルタとマリアという姉妹の家にて「主との交わり」

□アウトライン

- A) この家族について（ルカ 10：38）
- B) 姉マルタのいらだち（ルカ 10：39～40）
- C) イエスの応答（ルカ 10：41～42）

A) この家族について（ルカ 10：38）

38 節 さて、一行が進んで行くうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタ
という女の人がイエスを家に迎え入れた。

- ある村・・・ベタニア（ヨハネ 11：1）。オリーブ山の南東側登山道の下の方に位置する村。オリーブ山に登り、その西側を下ると、エルサレムに至る。エルサレムまでは、ほんの 2～3 マイル（約 3～4 km）である。
- マルタという女の人・・・家族は、マルタ、妹マリア、弟ラザロ。両親は登場しない。おそらくすでに亡くなっていて、年長者のマルタがこの家の女主人であったのであろう。
- イエスを家に迎え入れた・・・70 人の弟子たちの派遣によって少なくとも 35 か所の滞在先が準備されていた（ルカ 10：1）。ベタニア村での滞在先がマルタの家であった。
- この家族は、このあと、重要な二つの出来事に関係する。

➤ 第一は、ラザロのよみがえり（ヨハネ 11 章）

弟ラザロが病死する。死んでから 4 日後に、イエスが彼をよみがえらせる。これはイエスが「ヨナのしるし」と予告しておられた奇跡である。

なお、「ヨナのしるし」は全部で 3 回ある。2 回目はイエスご自身の復活、そして 3 回目は「二人の証人」の復活である。3 回目はこれから起きることでその時期は大患難期の間、場所はエルサレム、「二人の証人」と呼ばれる預言者たちが死んで、三日半の後、復活し、人々が見ている中を天に上げられる（黙示録 11 章）

これら 3 回を「ヨナのしるし」というのは、旧約の預言者ヨナのよみがえりのように、死後 3～4 日でよみがえり、または復活するからである。

➤ 第二は、マリアが香油をイエスの足に塗る出来事（ヨハネ 12 章）

イエスが十字架にかかる 6 日前、夕食の席で、マリアがイエスの足に高価な香油を塗り、自分の髪でその足をぬぐう。

この香油について、イエスは「マリアは、わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです」（ヨハネ 12：7）と言われた。マリアは、イエスが間もなく死んで復活することを理解していて、イエスの葬りの準備として香油をイエスの足に塗るのである。

イエスの死と葬りと復活について、当時、使徒たちですら理解していなかったことを、ベタニアのマリアは理解していた。

福音書の記録を見るかぎり、イエスの十字架の前に、イエスの死と葬りと復活を信じていたのは、ベタニアのマリア、唯一人である。なぜ、彼女はそのような理解を得たのか。その答えが、今回の記事の中にある。

B) 姉マルタのいらだち (ルカ 10 : 39~40)

39~40 節 彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた。ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのに、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」

- 主の足もとに座って・・・弟子が先生の教えを聴いて学ぶ、という意味。当時のラビ（先生）は座って教えた。イエスが座り、マリアも座ってイエスの話に聞き入っていた。
- いろいろなもてなしのために・・・イエスたち一行を迎えて、マルタは足を洗う水を出し、休む部屋に案内し、食事の準備の進捗に気を配っていたであろう。あれやこれやで気をもんでいたのに、妹のマリアは座ってイエスと話している。マルタはイエスのそばに来て、ラビ（先生）らしく妹を指導してくださいと申し立てた。

C) イエスの応答 (ルカ 10 : 41~42)

41~42 節 主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」

- 必要なことは一つだけです・・・誰にとって、必要なことなのか。それは、主イエスにとって、である。
 - マルタはイエス一行の必要に応じようと、いろいろなことを思い煩ってしまい、心を乱してしまった。
 - しかし、そもそもイエスが 70 人の弟子たちを派遣して準備させた滞在先は、どのようにして準備されたのか。「行き届いたサービス、快適な部屋、食事のおいしい宿」を比較しながら決めたわけではなかった。その村で最初に弟子たちを受け入れてくれる「レムナント（イスラエルの残れる者、真の信仰者）」の家を見出すためであった。イエスにとって必要なことは一つだけ、レムナントとの霊的な交わりである。

- ここでは、マリアがそのイエスの必要に応じてくれたのであった。
- マリアは、主のことばに聞き入っていた (39 節)・・・主は何を話しておられたのか？
 - この時期は、紀元 29 年の冬の宮清めの祭りの前、11 月か 12 月の上旬くらいであろう。イエスの十字架は、翌年 4 月の過越の祭りにおいてである。
 - イエスの話は、あと数か月後に迫ったご自身の死と葬りと復活についてであろう。この予告はすでに幾度も使徒たちに教えられていたが、彼らは理解できないでいた。
 - 主イエスが座って語られる話に、自分も座ってじっと耳を傾けたベタニア村のマリアだけが理解したのであった。
 - そして、マリアは、イエスの葬りの日のために、「**純粋で非常に高価なナルドの香油 1 リトラ (約 328 g)**」(ヨハネ 12 : 3) を準備することになる。その価値は「**300 デナリ**」(ヨハネ 12 : 5)、当時の労働者の日給 300 日分であった。

□まとめ

主イエスが望み、必要としてくださっているのは、私たち信者との交わりである。

そもそも、父なる神は、人の間に住むことを望んでくださる神である。そのために天地万物を造り、人をお造りになった。そして、子なる神が人となられたメシアの呼称のひとつは、「インマヌエル (神が私たちとともにおられる)」である。

主イエスは、マルタに対して、「**必要なことは、一つだけです**」と言われた。

主イエスがここで「**必要なこと**」と言われたのは、マルタにとって必要なことではない。

主イエスにとって必要なことである。

そして、それは「**一つだけ**」、私たち信者との交わりである。

主がここまで人に対してへりくだってくださるとは、何ということであろうか。

他方、私たち信者にとって主との交わりをいただけるのは、素晴らしい恵みである。

そして、この恵みを受け、イエスを知れば知るほど、私たちは心を乱すことがなくなる。

私たち信者が主のために何かする (活動する、奉仕する) ことよりも、私たちが主の足もとに座り、主のことばに耳を傾け、主のみわざを思い巡らし、主イエスを知ることが優先する。それなくしては、どんなに忙しく奉仕したとしても、心を乱すだけである。